

テレビ番組の暴力描写に関する内容分析 視聴者への影響可能性とその対策に向けて

JTVS(Japanese Television Violence Study)プロジェクト

	<名前>	<所属>	<職名>
代表研究者	坂元 章	お茶の水女子大学	教授
共同研究者	鈴木 佳苗	筑波大学	講師
"	佐渡 真紀子	お茶の水女子大学	研究員
"	長谷川 真里	お茶の水女子大学	研究員
"	堀内 由樹子	お茶の水女子大学	

目 的

近年、テレビ番組の暴力描写が青少年犯罪の原因の1つに挙げられており、こうした状況を受けて放送規制の問題が議論されている。しかし、最近の日本のテレビ番組に日常的にどのような暴力描写が見られるのかに関する研究は少ない。

米国では、1994年から1997年にカリフォルニア大学サンタバーバラ校(University of California, Santa Barbara)の研究グループによって大規模な米国テレビ暴力研究(National Television Violence Study; NTVS, 1996)が行われた。この研究では、暴力行為を「相手に身体的な被害をもたらすことを意図して、切迫した脅威を与えたり、実際に暴力を行使する行為」と定義し、行為の理由、報酬・罰などの暴力行為に関する文脈を捉えることのできる手法を用いて、様々なジャンルの番組(ドラマ、バラエティ、アニメ、映画、子ども向け番組)を分析しており、世界的に高く評価されている。

こうしたNTVSの分析の枠組みを用いれば、最近の日本のテレビ番組における暴力行為の数、頻度などを量的側面から捉えることに加えて、暴力行為の描かれる文脈を、行為の理由、報酬・罰、行為に関わるキャラクターの特徴などの質的側面から捉えることが可能となる。そこで、本研究では、NTVSの定義および分析の枠組みを用いて、日本のテレビ番組の暴力描写の特徴を検討し、今後の対策に向けての基礎的資料を提供することを目的とする。

方 法

1. テレビ番組のサンプリング

分析対象とするテレビ番組については、番組編成の切り替え時期に重ならない、特別番組が少ない時期を考慮し、視聴者調査に用いられる2003年1月14日～1月20日に、公共放送2局(NHK, NHK教育)、民間放送5局(日本テレビ, TBS, フジテレビ, テレビ朝日, テレビ東京)において東京で放送された番組を終日録画した。その中から無作為に280時間(1日40時間分)の番組を抽出し、さらに、NTVSに準じて、ドラマ、バラエティ、アニメ、映画、教育番組の5ジャンルに該当する番組を抜き出し、分析対象とした。

2. コード化

2003年6月に、NTVSの内容分析で用いられたコードブックを翻訳し、日本語版の冊子を作成した。7、8月には、お茶の水女子大学にて、大学生35名¹に対して約20時間の研修を行った(本研究の研修時間はNTVSの研修時間よりも短い。コードブックを事前に熟読してもらい、映像を見ながらの解説と実践的なビデオ評定を行うことで短縮した)。

¹ 本研究は、放送文化基金および平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A(2), 課題番号: 15203026, 研究代表者: 坂元章)の助成を得て実施し、計35名のコーダーにビデオの評定を依頼した。

研修終了後、評定者にビデオを無作為に郵送し、コード化の作業はコーダー各自が都合のよい時間に大学 / 自宅で個別に実施した。ビデオは、評定終了後にコード票と合わせて返送してもらった。

3. 分析

暴力描写の分析単位は、NTVS と同様、行為、セグメント、番組という 3 つのレベルを採用した。具体的な指標については表 1 に示した。番組全体および番組の種類（ドラマ / バラエティ / アニメ / 映画 / 教育番組）ごとに暴力描写を比較した。

結 果 ・ 考 察

1. 分析対象番組数と一致率

分析対象番組数は、上記 5 ジャンルで計 86 本であった（放送時間 65 時間 14 分）。この中からランダムに 10 本を選び、コーダー間の信頼性のチェックを行ったところ、暴力描写の行為の一致率は.83、セグメントの一致率は.83 であった。ジャンル別の分析番組数は、ドラマ、バラエティ、アニメ、教育番組、映画の順に多かった。

2. 暴力描写の特徴

1 時間あたりの暴力行為数・セグメント数を番組ジャンルごとに比較したところ、アニメ、バラエティ、ドラマ、映画、教育番組の順に暴力描写が多く見られた。

以下では、行為レベル、セグメントレベル、番組レベルの分析結果について順に述べる。

2-1. 行為レベル

コード化する行為の種類は、「切迫した脅威」「具体的行為」「被害結果」の 3 種類とした。暴力描写を含む番組数は 86 本中 59 本（68.6%）であった。

暴力行為のタイプ

「具体的行為」の描写が 79.2%と圧倒的に多く、「切迫した脅威」および「被害結果」の描写はともに約 1 割であった。ジャンルごとに比較すると、特に、アニメ、教育番組、映画では「被害結果」の描写はほとんど見られなかった。

行為の理由

全般的に、暴力を行使する理由として多く見られたのは、「怒り(29.5%)」や「個人的利益の追求(24.1%)」であった。これらの理由は、感情や利益追求など個人の内的動機にもとづいており、正当化されにくいものと考えられる。一方、「生命の保護(11.3%)」や「報復(5.4%)」など、他者からの攻撃への対抗のような正当化されやすい理由による暴力描写は、比較的少なかった。

また、バラエティ番組では他のジャンルに比べて人を楽しませる理由で行われるコミカルな暴力が顕著に多かった(28.4%)。

表 1 分析レベルと指標

分析レベル	指標
行為	行為（暴力行為）の手段、種類、理由、回数、継続時間、効果（被害、成果）、実行者とその人数、対象者とその人数 など
セグメント	セグメント内の行為（暴力行為）に関わる全てのキャラクターの特徴（年齢、身体的特徴）、ユーモア、行為に対する周囲の人々の反応（報酬、罰）など
番組	番組内の行為（暴力行為）に関わる全てのキャラクターの特徴（種類、性別、人種、善人 / 悪人、ヒーロー性）、番組の主題、現実性、番組のスタイル（反暴力テーマの有無）、番組を通しての行為に対する周囲の人々の反応（罰 / 報酬）、被害・苦痛の持続 など

暴力行為の手段

全体的な比率をみると、「身体的手段」が 49.3%と約半数を占め、次いでロープなどの身近な道具を用いた暴力が多かった(18.7%)。拳銃をはじめとする小火器は 7.3%と比較的少なく、大型兵器はほとんど使用されていなかった。

暴力行為の被害や苦痛の描写

被害描写の程度 被害描写は、画面上に「描写なし」が 3.5%、「被害なし」が 30.3%、「軽度」の場合が 23.5%で、被害が描写されないか、されていても軽度のケースが全体の約 6割であった。これに対し、「中程度」の被害描写は 5.6%、「重度」の被害描写は 18.8%であった。

苦痛描写の程度 苦痛描写は、画面上に「描写なし」が 6.7%、被害者の「苦痛なし」が 25.6%、「軽度」の場合が 29.9%で、苦痛が描写されないか、されていても軽度のケースが全体の 6割を超えていた。これに対し、「中程度」の苦痛描写は 13.7%、「重度」の苦痛描写は 5.2%と少なかった。

行為レベルの総括

正当性が高い暴力行為の視聴は、攻撃性の学習を促進すると考えられており、一方、正当化されない、悪意のある暴力行為の視聴は、攻撃性の学習を抑制する方向に働くと考えられている(NTVS, 1998)。本研究の結果では、正当化されにくい理由での暴力行為が多いことが示されており、これは、攻撃性を抑制する方向に働くものであると考えられる。しかし、一方で、被害や苦痛の描写が少なく、攻撃性の学習を抑制しにくい要因も見られた。

また、本研究の結果を NTVS(1996, 1997, 1998)の結果と比較すると、日本のテレビ番組の暴力描写では、暴力行為の手段において、身体による暴力が多く、拳銃による暴力が少ないという特徴があることが示唆された。

2-2. セグメント・番組レベル

以下では、7つの文脈的要因(「行為者の魅力」「現実的な場面での暴力」「顕在的・露骨な暴力」「暴力に付随したユーモア」「罰」「反暴力のテーマ」「被害・苦痛の持続」)の結果について述べる。

行為者の魅力

全体的に魅力的な行為者である場合は少なかった。しかし、教育番組やアニメでは「肉体的に強い」行為者がわずかに見られ、また、アニメでは他のジャンルよりも「善人」が多く見られていた(46.4%)。

現実的な場面での暴力

キャラクター、場面設定、出来事の現実性について検討した結果、「フィクション」が最も多く(56.1%)、続いて「空想」が多かった(24.6%)。キャラクターが存在しえる、あるいは出来事が現実には起こりえるという理由で、NTVSでは「空想」以外の番組(「現実そのまま」「現実の再現」「フィクション」)を現実的な場面での暴力としており、本研究では、これらが全体の4分の3を占めていた。

顕在的・露骨な暴力

暴力行為や手段がクローズアップされる場合は全体の1割強と少なかった。また、血の描写もほとんどなかった。

暴力に付随したユーモア

ユーモアのあるセグメントの割合は、27.2%であった。番組ジャンルごとに見ると、バラエティでの「ユーモアあり」の割合が多く、教育番組や映画では逆に少なかった。

罰

セグメントレベルにおいて罰が見られることは少なかった。また、番組レベルでは、番組を通して罰がみられることは少なかった。

反暴力のテーマ

反暴力のテーマについては、全ての番組種類でない場合が多く、9割以上で「なし」という結果であった。

被害・苦痛の持続

被害・苦痛については、被害・苦痛が暴力行為の起こった場面を越えて長く描写されていたのは約1割であった。

セグメント・番組レベルの総括

上記の文脈的要因の中で、「行為者の魅力」「現実的な場面での暴力」「顕在的・露骨な暴力」「暴力に付随したユーモア」の4つの要因は、攻撃性を促進すると考えられている。番組全体として、これらの描写は少なかったが、番組のジャンル別では、アニメの「善人」による暴力、バラエティの「ユーモア」の多さのように、攻撃性を促進する要因が多く見られるものがあった。

一方、「罰」「反暴力のテーマ」「被害苦痛の手がかり」の3つの要因は、攻撃性を抑制すると考えられている。本研究では、罰がない場合が多く、反暴力的テーマや被害・苦痛の持続が少ないことが示されており、攻撃性の学習を抑制する要因が少ないことが危惧される。

参考文献

- 1) *National Television Violence Study (vol.1)* 1996 Sage, CA.
- 2) *National Television Violence Study (vol.2)* 1997 Sage, CA.
- 3) *National Television Violence Study (vol.3)* 1998 Sage, CA.

研究発表

佐渡真紀子・坂元章・鈴木佳苗 (2004,12) テレビ番組における暴力および向社会的行為描写の分析, 日本教育工学会論文誌, **28**(Suppl), 77-80.

鈴木佳苗・佐渡真紀子・坂元章 (2004,7) テレビ番組における暴力描写および向社会的行為の描写 (1) - 研究の概要と描写の程度 - 日本社会心理学会第45回大会 (北星学園大学) 発表論文集, 738-739.

佐渡真紀子・鈴木佳苗・坂元章 (2004,7) テレビ番組における暴力描写および向社会的行為の描写 (2) - 暴力描写の行為レベルでの分析 - 日本社会心理学会第45回大会 (北星学園大学) 発表論文集, 700-701.

堀内由樹子・鈴木佳苗・佐渡真紀子・長谷川真里・坂元章 (2004,7) テレビ番組における暴力および向社会的行為の描写 (3) - 暴力描写のセグメントレベル・番組レベルでの分析 - 日本社会心理学会第45回大会 (北星学園大学) 発表論文集, 742-743.

Suzuki, K., Sado, M., Sakamoto, A., Isshiki, N., & Hattori, H. (2004, 8) Violence in Japanese TV programs: Content analysis by using the coding system of the national television violence study. In: International Congress of Psychology Abstract Book (28th, Beijing, China, Aug. 793, 2004)

連絡先 (E-mail)

坂元章 (sakamoto@cc.ocha.ac.jp)

鈴木佳苗 (kanae@slis.tsukuba.ac.jp)